

「嘆きの先にある希望」

エレミヤ書  
ヨハネの黙示録

第31章 15節～17節  
第21章 1節～4節

説教 左近 豊 牧師

イエス・キリストの十字架と復活に心を向け、私たちがどのような縄目から解放され、贖われたのか、絶望から希望へ変えられたのかを思い起こす、それがレントの時であります。信仰の喜び、平安だけでなく、悲しみ、悔い改め、罪の償いを思い起こす時であります。悲哀というものを聖書に根差して語りつぎ、追体験する、このような歩みを聖書の民は連綿と続けてまいりました。

その一つの例をユダヤ教の人たちの中に見ていきます。彼らは、旧約聖書の哀歌を読み継いできました。哀歌は、紀元前6世紀、エレミヤ書と同時期の書物で、バビロン捕囚をきっかけに町全体がガレキの山と化し、民全体が引き裂かれるようにして苦勞の極みに陥られた出来事を示す書物であります。悩み悲しみの言葉、耳を塞ぎたくなるような言葉がそこにあります。

ユダヤ教暦のアブの月の9日、紀元前586年のこの日、エルサレムの神殿が破壊されたことを思い起こし、毎年この日に哀歌を読み継いできたのです。崩壊の記憶、傷、破れの歴史を風化させることもせず、忘却の彼方に消し去ることもせず、毎年思い起こし追体験するのです。忘れてしまいたい哀しみも、封じてしまいたい過ちも、覚えておきたい喜びと一緒に、はじけんばかりの讚美と共に。そしてそこにある嘆きの言葉は、新しくおこる苦難の中で、もう一度読み直されるのです。

私たちの教会のレントは、このような営みに息づいているといえます。陰府(よみ)に下られ、墓の中に横たえられ、骸(むくろ)となられた神であるキリストを仰ぐとき、そしてキリストが身代わりになってくださった私たちの罪を顧みるとき、復活の主がまとわせてくださった新しい命を、朽ちるべき死の現実を、私たちが贖い出された悲しみの歴史を、その救いでしっかりとつなぎとめられて、引き上げられたことへの感謝をもって生き直す、それがレントの時といってよいと思います。

今日読まれたエレミヤ書にラケルという女性が出てきます。ラケルはヤコブの最愛の妻ですが、子どもができずに長く苦しみ、ようやく授かった子どもを出産する時に命を落とす悲劇の女性として描かれています。旧・新約聖書は、このラケルを痛みを身に負うて苦しむ母親として描いています。エレミヤ書31章は、神との新しい契約について初めて語られる希望に満ちた箇所ですが、そのただ中でラケルは嘆き、人々の悲しみを代弁します。バビロン捕囚での出来

事、母の手から多くの子どもが取り去られ、母は慰め語られます。イエス・キリストの誕生によって地位が奪われることを知った王が、辺り一帯の2歳以下の男児を虐殺するのです。

聖書の時代だけでなく、今も、貧しさ、誤った政策、テロと報復などによって失われた子を悼み抗う親の叫びとしてラケルの嘆きが響いています。レントの時、時を超えて今に響くラケルの嘆きを聞きながら、私たちも聖書を通して嘆きへと招かれています。それは誰かに同情するためだけではありません。むしろ、この嘆き、叫びを通して共に祈り、とりなしをするためです。

自らがラケルの哀しみを負っている時、また教会の兄弟姉妹の痛みの傍らにある時、そして世界のゆがみ、人間の罪のために引き裂かれた破れ目に立ち、とりなしの祈りをささげる時、私たちはラケルと共に、嘆きの詩人や哀歌と共に、聖書の民と共に、神に祈りを捧げているのです。レント、それは個人を通して、また個人を超えて、時を貫いて、共同体の祈りの業に、嘆きの働きに、世界のグリーンワークに加えられているのであります。

そして神は、このラケルの哀しみに目を留められ、懇ろに語りかけるのです。『泣きやむがよい。目から涙をぬぐいなさい。あなたの苦しみは報いられる』(エレミヤ書31章16節)、『あなたの未来には希望がある』(17節)と。今見ているこの現実がすべてではない、溢れんばかりの希望へと向かっていくと、言葉と幻によって示されます。

この大逆転劇は何をもって可能となるのか、聖書ははっきりと示します。そこに神の途方もない喪失があったことを。私たちの救いのために、神の義を全うするために、人間が受けるべき裁き、滅び、罪を贖うために、隔てを取り去る和解のために、たった一人の神の懐にある御子イエス・キリストを失われたのであります。愛する「愛」と、哀しみの「哀」が、この神の御子の死に重なっているのです。だから、『もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである』(ヨハネの黙示録21章4節)と宣言されるのです。

(記 説教要約奉仕者)